



vol.
174

今月のお題

.....

科学の歩みを俯瞰する

たくさんの方がいろいろなことを考え、観察・実験してまた考えることで進んできた科学。その歩みを振り返る展示を見てきました。

高梨直絢（東京大学）／平松正顕（国立天文台チリ観測所）

最新の科学の話題に負けず劣らず、古い時代の話も好きな筆者（平松）。本誌でもギリシャや中近世ヨーロッパをテーマにした記事には特に注目しています。そんな私にぴったりの展示が上野の森美術館で開催されていました。「世界を変えた書物展」です。

金沢工業大学が所蔵する、たくさんの古くて珍しい本たち。ガリレオやケプラー、ニュートンなど天文学の歩みを語るうえでも欠かせない人たちが記した本はもちろん、数学、電磁気学、化学、工学など幅広い分野でまさに「世界を変えた書物」が並びます。ガリレオの月のスケッチ、コペルニクスの地動説に基づいた太陽系の軌道図など、ひとつひとつの図版が人類の歩みをあらわしているようで、とても見ごたえがありました。平日に休みを取って行ったというのにたいそう人出でゆっくり見ることができなかったのがちょっと残念だったかも。さらに

欲を言えば、マクスウェルの電磁気学やアインシュタインの相対性理論は、著者名の書かれた扉ページじゃなく象徴的な式が書かれたページが見たかったな、とも思いますが、そんなわかりやすいページはもしかしたらないのかも。今はネットでいろいろ読める時代ですが、それでも実物がすぐそこにあるという迫力はやっぱりすごい。

怒涛の実物展示のあいだには、書物のタイトルが壁一面に並び、それぞれが線でつながれて互いの関係を示す展示がありました。「世界を変えた書物」といっても突然その書物が天から降ってきたわけではなく、たくさんの書物、つまり人々の思考が積み重なって、あるときに臨界点を突破するわけです。孤高のヒーローのように描かれがちなアインシュタインの相対性理論も、光速度測定実験や光の運動に関するさまざまな論考があったうえではじめて生まれたもの。そ



たくさんの書物が呼応しながら時代が進んでいくような展示。

してまた、科学の道筋が一本道ではなく、多様な試みが複雑に絡みあって進んでいくことも一目瞭然でした。この俯瞰的な視点、とても大切だと思います。

天文学の世界でも俯瞰的な視点を、とっていたところ、我らが一家に1枚宇宙図を思い出しました。あれは空間と時間のふたつの軸のなかに現代天文学を描いたもの。今度は天文学史的な観点から項目を配置しなおすとか、研究の中身の関連だけに注目して描くとか、第2・第3の宇宙図を思い描いてみるのも面白いかもしれません。